

オーストラリアの教育制度に学ぶ

東京都豊島区立椎名町小学校教頭 中澤米子

「オーストラリアの教育」は、一括りで説明できない多様性をもっている。義務教育年齢さえ州によって違いがある。授業の運営に関しては、各学校や教師に高い自由度が認められているため、同じ州、同じ地域によっても、実にさまざまな学校の違いとなる。今夏、訪問した7つの学校もまさにそれぞれであった。これは、オーストラリアの国が130以上の国籍をもつ、移民による国であることにも起因している。多様性は、高度な多重文化社会に応じるために生み出された教育制度と方法であるからだ。

そこで、「オーストラリアの教育」の現状を作っているいくつかの多様性について挙げてみる。

○学年の年齢構成には幅がある

日本では、小学校1年生といえば、特別な例外を除いて、6歳か7歳と決まっている。しかし、オーストラリアの学校では、次頁の表に示すように、同学年に4～5歳の差のある子供がいるのはめずらしいことではない。

『年齢に応じた教育よりも、個々の発達や適性に応じた教育を受けることが望ましい』とする考えたが一般的だからである。従って、義務教育の落第もそれほど抵抗はなく、無理して進級することよりもよいことだと考えている。訪問校ダブルベイ小学校でも、4年生と5年生が同居するクラスであった。ここの学校の理由は人数に端数が出たからであるという。こんなことも許容されるのである。

○スクールポリシーをつくる

オーストラリアの小学校には、日本にあるような教科書や指導書というものはない。どのような内容で授業を進めるかは、個々の学校や教師に委ねられている。

では、個々の学校や教師は何によって授業をつくるのかというと、教育区を管轄する教育事務所が、州の方針に沿って、スクール・ポリシーを作成するための「プログラミング・ポリシー」なる各種の手引き書を発行している。各学校ではこれらを参照しながら、自分の学校に即したスクール・ポリシーを作成するのである。

スクール・ポリシーは、学校のいわば、『所信表明』である。その作成には、「地域社会が学校に何を望んでいるか」などが重要な視点となる。第2外国語に何を選ぶかなどは、地域が決めることである。私たちが訪問した多くの学校で日本語が学ばれていたが、保護者の希望であるという。小学校において「英語」を学ばせるかどうか議論の段階にとどまっている日本とはかなり違うものがある。

さて、日々の授業は各教師がポリシーに沿って授業を計画し、実践するのである。教科も、一つの教科が複数にまたがって統合的(integrated)に行われるのもしばしばである。

こうしてオーストラリアの教育をみると、オーストラリアの教育は、多様性、不均質性、差異性といったことを当然のこととする、いわば『局所的物語』なのに対し、日本の教育は、あまねくすべての子供を『偉大なる中心的物語』の渦に巻き込む感がある。そして、その『中心的物語』の文脈の中で制度が考えられ、内容や方法が語られてきたとあってよい。

しかし、多様であること、不均質であること、差異があることを当然としなければならない、これからの「国際社会」の現実を考えるとときどうだろう。オーストラリア教育制度に多くの示唆を見い出せるのではないだろうか。

オーストラリアの学校見聞記

★時間は子供が管理する アドロス小学校

7年生の日本語の時間を参観していた時のことである。「迷子の子猫ちゃん」の歌を我々参観者と子供たちで合唱し、とてもなごやかな雰囲気になっていた。突然1人の男の子が、ハッとした表情をして教室から駆け出して行った。

しばらくして、「カランカラン」という鐘の音が聞こえてきた。昔懐かしいあの音である。案内のシオン君の説明によると飛び出していったフィリップ君は鐘当番だそうである。リセ(業間)・昼休みを鐘で知らせるのである。なんだそれだけのことかと思っはいけない。リセではおやつを食べることができるのである。この時間が短くなるのは子供にとっては大問題である。

学校では、この2回しか鐘はならない。時間割はあるが、あとは教師の裁量で進められていく。いかにもオーストラリアらしいゆったりとした雰囲気を感じた一コマであった。(岡山、遷喬小・小瀬)

★日本と違う授業風景

アップルコスハイスクール
モニカさんの出身校アップロクロス・ハイスクールを訪問し、次の4点に驚いた。①敷地、②芝生や木々等の自然、③各教室、校舎の造り、④授業である。

中でも特に興味深かったのは授業に関することである。始業のチャイムがない、ホームルームは縦割りで行うなどである。

保育の授業においては、ヒヨコを1人1羽育てることによって、生命の重要性、自らの行動に責任を持つということを指導していた。また、図書室においては天窓から差し込んだ太陽の下でパソコンをやる者、辞典を広げている者、好きなスタイルで学習している姿が、とても印象的だった。授業をするにあたり、何が大切なことか警告されたように思う。

(京都、西山高・石田)



・休憩時間の子供たち(おやつも食べる)

★学校が抱える差とは?

バルメイン中学校

緑豊かな高級住宅地と青く澄んだ静かな入り江に囲まれたバルメイン中学校は、シドニー中心から少し離れた場所にある。

地域的に高いに水準に位置するこの学校は私立学校へ流れる生徒が多く、現在の生徒数はわずか350人と少ない。また、14人のハンディキャップをもつ生徒を受け入れている。

数学、科学、コンピュータ、スポーツ、音楽、ドラマ、外国語(フランス語やイタリア語)の授業が行われている。例えば、コンピュータの教室ではグラフィック、ワープロ、データベースそして個人に合ったソフトウェアが用意され、一人一人が目的に応じた画像をディスプレイに映し出していた。音楽室では、さまざまな楽器を持ち込んで練習しているかと思えば、裏の芝生に楽器を持ち込んで練習している姿もみられる。ドラマの教室では、短い場面の中で全員が順番に、個々に独自の表現を披露する風景がある。

この学校の抱える“差”とは生活水準の差であり、大金持ちからホームレスの子供たちまでが在籍していることが特色であり、どのように助成していくかが課題となっている。(大阪、榎本小・橋本)



●オーストラリアの学校系統図



★熱心な日本語の授業

クロマー・ハイスクール

1920年に創立されたこの学校は、生徒数900人で、生徒の数を確保するために多くのコースが設定され、60人余りの教員が教科ごとに群をつくる体制をとっている。

近くに公立の女子高校があるせいか男女の比は6:4になっている。全体では、5~10%が10年生で、70%が12年生で卒業していく。この学校の特色は、優れた能力をもっている者にも、スポーツやアートなども学ばせ、総合的にバランスがとらせたり、インデペンデントセンターで生徒の発表などを通じて個性化教育を促進したりすることである。また、インドネシア語をはじめアジアの言葉や、ヨーロッパの言葉を学習することができることである。今回は、日本語の授業をみる事ができた。書道、相撲など日本の文化が飾られた教室の中で、日本のマクドナルドの広告のメニューをもとに学習が進められていた。明るく楽しく開放的な雰囲気の中にも、学習に対する意欲と個々が持つ目標に向かう情熱が感じられた。

(大阪、榎本小・橋本)

●ある州の小学校在籍児童の年齢分布

年齢/学年	キリガタ	1年	2年	3年	4年	5年	6年
5歳以下	2,936						
5歳	55,023	2,795					
6歳	3,556	54,689	2,018				
7歳	39	7,422	52,750	2,232			
8歳		131	9,312	51,787	2,219		
9歳		3	108	10,942	52,399	1,851	
10歳			6	181	12,691	52,913	1,960
11歳				1	5	204	15,127
12歳以上						5	258
総児童数	61,554	65,040	64,258	65,129	67,518	70,154	72,925

★カリキュラムは教頭先生が作る
ダブルベイ小学校

レンガ造りの古い校舎で、各クラスが廊下でつながっている。全員の子供たちの作品が掲示してあり、似たような作品が並ぶのが日本的な印象を受けた。校庭がなく、近くの公園で運動をする。教える内容はトピックが中心で、学年のテーマで算数も国語も教える。来年度から算数と国語に力を入れ、その他は合科的なテーマで教えるという。

カリキュラムの規制はなく、教頭先生が編成し、他は教科部会みたいなものがあるという。学校中が32の縦割りになっていて上の子が下の子に教えている。

(東京、八王子第4小・堀竹)

★充実した図書館

クロマー小学校

広大な校庭、大きな自然木の下で明るい声をあげておやつを食べているひとなつこい子供たちのかわいらしい姿。

エリート教育をしていると自負する学校らしく、自由の雰囲気の中に秩序がしっかりしたハイセンスな学校である。

印象に残ったのは、読書の学習だった。サイレントリーディングの学習中、黙々と読書をしている子供たちの後ろのコーナーで先生を囲み、7~8人のグループが同一の本を読みトーキングしている風景だった。当然、図書館には、同じ本をまとめて整理したコーナーがある。自学を進めるためには、図書館の施設の充実と専門の司書教諭の必要性を痛感した。

(東京、栗原北小・橋本)

★オーストラリアの学校施設

今回の視察で見られた共通事項を以下に列記してみる。

広大な自然に囲まれ、ランドスケープに恵まれた環境。廊下の動線状（外ベンチに生徒のナップザックが散乱）が楽しく配置され、さらに、中庭スペースが十分確保されていて、語らいの場がどこにでもあるレンガ・ブロックの平屋建てという印象だ。

一足製の床は、リノリューム、長尺カーペット仕様。汚れ・塵がほとんど気にならない。それは、その気にさせる全ての特別教室の雰囲気、各教室の展示・掲示の工夫（壁面のペインティング・色模造紙の活用の仕方）にある。

教室内の4壁面全てを、教師自身の創造的・意欲的（低賃金の割に）な対応で、机、教材、教具の配置を不思議にマッチングさせ、「教室は生きている」と感じさせてくれた。また、女性校長が多いのも印象に残ることである。

図書室は充実し、低・中・高学年を問わずごく当たり前に活用されている。しかし、第2外国語で日本語を学ぶ教室で、人見知りせず、気軽に声をかけてくれた児童・生徒に対し、日本の教材、教具、資料をたくさんそろえてあげたい気がしたのは私だけだろうか。

（東京、教育環境研究所・小山）

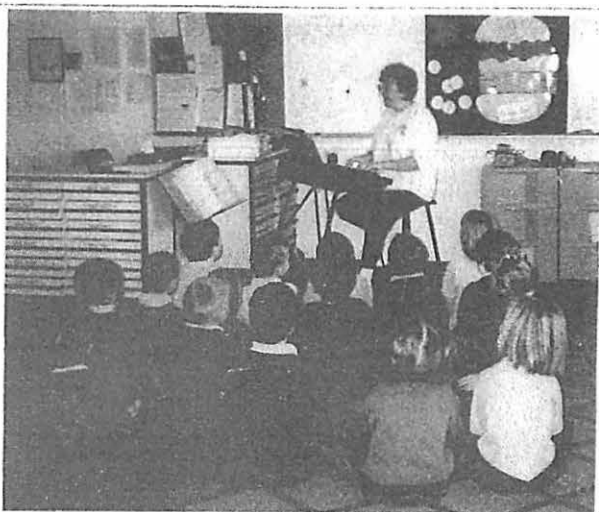
事務局だより

★研究会の案内発送について

各学校の研究会案内を、希望があれば会員の方に配布していますが、郵送料や事務作業等の問題から次のことをお願いします。

- ①サイズはB4まで
- ②紙はなるべく薄いもの（厚いと重くなる）

最近、A4サイズの案内も多くなっていますが、大きなサイズの研究案内はお送りできません。その場合は、B4に縮小して印刷し直し事務局までお送りください。よろしくお願ひします。



★自由と厳しさと

オーストラリアの学校は、とても開放的です。席も自由でいいし、床で勉強してもかまいません。授業も自分で選べるし、高校も入試がないので自分の行きたい高校に行けます。

日本からみるとうらやましい限りですが、逆に厳しいともいます。授業や高校を選べるということは、将来のことを考えていないとできないからです。それをみんなでやっているということは、オーストラリアの学生が自分の意見をしっかりと持っているからだと思います。

（佐賀、中学生・松本）

研修・付記

今回の海外研修は、オーストラリア出身の上智大留学生・モニカさんの案内で、パースとシドニーの7つの学校を訪問することができました。モニカ家にも招かれ、オーストラリアの家庭の暮らしぶりの一端を拝見できました。

事務局への問い合わせ・連絡先
〒115 東京都北区赤羽南 1-16-2-502
03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和

全国個性化教育研究連盟会報 第39号
平成8年11月9日 発行
編集責任者 事務局長 高浦勝義